岩見沢東高等学校　男子テニス部通信　　２０１３．４．６．

Ganto Tennis

第３３号

文責：佐々木雄介

第１０ゲームについて考える

第１０ゲームは５－４のゲームカウントで行われる。しかし、５－４ up と５－４ down では、プレーヤーの心理状態はまったく違う。今回話題にするのは、５－４ up で迎えた第１０ゲームの戦い方について。相当微妙なメンタリティが必要である。

さて、ダブルスの試合を始める。トスに勝って、お前たちは風下、そして日差しを背負うエンドを選んだ。有利に試合を始められる。対戦相手はサーブを選んだ。こちらはお前が先にサーブをする。試合は大接戦。一進一退のまま、５－４ up で第１０ゲームを迎えた。この時、お前たちはどちらのエンドにいるか、またサーブは誰か、以下の選択肢より選び、記号で答えよ。

①風上のエンドでお前のサーブ。②風下のエンドで相手のサーブ。③風上のエンドで相手のサーブ。④風下のエンドでお前のペアのサーブ。⑤風上のエンドでお前のペアのサーブ。

よく考えろ。４ゲームごとにサーブもエンドも試合開始と同じ状態になる。だから、第１３ゲーム（タイブレーク）は、第１ゲームと同じエンド、同じサーバーというのが考え方の基本。つまり大事な大事な第１２ゲームと、もっと大事な７点勝負のタイブレークの６点目までが第１ゲームと同じエンドでプレーすることになる（だからこそ、トスに勝ったらいいエンドを取らなくちゃならない）。ということは第１０・１１ゲームは、それと反対側の風上のエンド。サーブは偶数の第**２**・４・**６**・８・**１０**・１２ゲームがお前達のサーブ、そして**太字**がお前のサーブ。だから答は①・・・・・ちゃんと考えたか？

さて５－４ up。風上のエンドでお前がサーブをする。あと１ゲーム。なんとしてもここで決めたい（５－５の第１１ゲームは絶対にやりたくない）、と考えるのは当然の心理。でもどうだろう。実力はほぼ互角。だからこそ５－４なんてことになるのだけれど、だとすれば、冷静に考えて、６－４でお前達が勝つか、それとも５－５で第１１ゲームを迎えるかは五分五分の確率なのだ。他人ごとみたいに言うな、と怒るかもしれないが、「冷静さ」とは自分のことを他人ごとのように客観化して捉えることでもある。

さて、半分の確率で訪れる第１１ゲーム、例えばアドバンテージ・レシーバーで、前衛がチャンスと思って飛び出したポーチがサイドアウトになってガックリきており、お前はドンマイ、ドンマイなどと言いながら、実はもっとガックリきている。そのわずか２０秒後に始められる第１１ゲームのホンネとは・・・・・「ヘビーな気持ちで迎えるやりたくなかったゲーム」「ゲームプランになかったゲーム」である。一方、同点に追い付いた対戦相手にとっては「何としてもやりたかったゲーム」なのだ。このメンタリティの違いは、両者の力が拮抗していればこそ、大きな違いになって現れやすい。

結論は、５－４ up の第１０ゲームでは「絶対にここで決めよう」などと力まないこと。数字上の厳然たるリードを確認しながら、タイブレークまで楽しむつもりで、リラックスし、落ち着いてプレーしようという余裕があってほしいものだ。